

あきらめない

丸山 勉

[聖書] 創世記 18章 20節～33節

主は言われた。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう。」その人たちは、更にソドムの方へ向かったが、アブラハムはなお、主の御前にいた。アブラハムは進み出て言った。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」主は言われた。「もしソドムの町に正しい者が五十人いるならば、その者たちのために、町全部を赦そう。」アブラハムは答えた。「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、わが主に申し上げます。もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれません。それでもあなたは、五人足りないために、町のすべてを滅ぼされますか。」主は言われた。「もし、四十五人いれば滅ぼさない。」アブラハムは重ねて言った。「もしかすると、四十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その四十人のためにわたしはそれをしない。」アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう少し言わせてください。もしかすると、そこには三十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「もし三十人いるならわたしはそれをしない。」アブラハムは言った。「あえて、わが主に申し上げます。もしかすると、二十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その二十人のためにわたしは滅ぼさない。」アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その十人のためにわたしは滅ぼさない。」主はアブラハムと語り終えると去って行かれた。アブラハムも自分の住まいに帰った。

[序] 佐藤 優氏のコラム

「オウム真理教」と名乗っていた一カルト宗教団体のことが23年の時を経て、また大きな話題になっています。教祖だった麻原彰晃こと松本智津夫と元幹部の7名の死刑執行が一度に行われ、死刑制度の是非や、また元教祖の遺体が神格化される恐れもあるという事で、それを遺族に渡さないようにするとか、そのようなことにスポットが当てられていることが多いように思います。

一昨日(7/13)の金曜日の東京新聞の朝刊に、キリスト者であり、作家、また元外務省主任分析官の佐藤 優氏が「本音のコラム」という欄で、違う視点からこの度の報道のあり方について文章を寄せていました。

「オウム真理教は「狂気のカルト」というレッテルを貼っても、問題の本質は分らない。ど

の宗教にも潜む本質的な危険性について掘り下げて考える必要がある。…筆者はキリスト教徒として、処女降誕や(死んだ)イエスが三日目に復活したこと、この世の終わりの日にキリストが再臨すると本気で信じている。近代の合理主義を基準にすれば、キリスト教徒も常軌を逸した信念を持っていることになる。

オウム真理教の暴発を防ぐために、われわれキリスト教徒に出来ることがあったはずだ。宗教の危険性を伝え、防止する手段を考えることは神学者の責任だと思う。

[1] 「宗教は危険」という言葉

私も、オウム真理教は「破壊的カルト」だと言って片付けてしまう気運には疑問を感じます。もちろん私はあのような無差別殺人を肯定する気持ちはひとかけらもありません。あれはハッキリと「悪」であると言わなければならないと思います。

しかしその上で思うのです。佐藤優さんも言うように、「どの宗教にも潜む本質的な危険性」というようなものもいつも覚えていなければならないのではないのでしょうか。

よく「宗教は危険だ」という言い方がされることがあります。特にこのオウム真理教の事件が発覚した後、いわゆる新興宗教だけでなく、既存の伝統的な宗教についても風当たりが強くなったことを覚えています。しかし、これは現代だけの話ではないと思います。昔から「宗教はアヘンだ」と言って、それは麻薬みたいなもので、本人たちは気持ちがいいかもしれないが、嵌り込み過ぎると危険だ、良い教えの部分だけを取り入れて、適度に距離を保つべきだ、と教える人は少なくないと思います。

では信仰と言うのは、まあ、自分で取り入れようとするその宗教の教えを取捨選択しながら、自分を高める一(いち)ツールのようなものなのではないでしょうか？

そのように考える方もあるでしょうけれども、キリスト教信仰とはもっと人格的なものです。文字通りイエス・キリストとの結び付きを何より大事にする宗教です。これについてはまたあとでお話したいと思います。

[2] 神様の審きとアブラハム

今私たちは、旧約聖書の「創世記」を通して、「信仰の父」と呼ばれるアブラハムと神様との関わりを見てきています。今日は18章です。ここでアブラハムは、それこそこの世界の歴史の重要な局面に立たされているのです。ソドムとゴモラという古代の町の「救いか滅びか」が決まっていく、極端といえこれ以上極端なことはない、時と場所に、神様によってアブラハムは立たされている、と言えます。

神様が、私たちの生きる世界の生殺与奪の権利を持っているというこの様な聖書の描写は荒唐無稽に思えるのでしょうか？しかし、聖書というのは、そのことは割引しません。ハッキリ言うのです。神様は正しくこの世界をお審きになることが出来るお方であると。ノアの箱舟の物語もそうでした。そしてこの世界に終末が訪れる時が必ず来るというのが新約聖書の約束です。それはキリストがもう一度おいでになる再臨の日です。その時は誰も知る

ことが出来ないのだとイエス様ご自身も語っておられます。

ところが、今日のこのアブラハムと神様とのやり取りは面白いですね。この世界の主権者は神様であるわけですから、アブラハムの嘆願を聞かずとも、ソドムとゴモラの町を滅ぼすことをすることが出来たと思います。所が、神様はアブラハムに、ご自身のご計画をわざわざ知らせています。17 節。「わたしが行おうとしていることをアブラハムに隠す必要があるだろうか。」また 20 節。「主は言われた。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう。」

その言葉を聞いたアブラハムはどうしたのでしょうか。神様の使いがソドムの方面に行くのを見ると、ああ、もう仕方がないと諦めたのでしょうか？そうではなく、このように記されています。

—「アブラハムはなお、主の御前にいた。アブラハムは進み出て言った。」(22、23 節)

[3] ねばり強い祈りを捧げることはみこころに適うこと

そこからの神様との駆け引きは実にドラマティックではないでしょうか。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい」と知ったアブラハムは、このままだと神様は正しい者も悪い者も滅ぼしてしまうに違いないと思い、神様に直談判するのです。ソドムには甥のロトとその家族もいるのですね。そのことも頭の中にあっただと思います。「もしかしたら 50 人は正しい人がいるかも知れません。それなのにいっしょくたに滅ぼしてしまうなど、あなたはするはずはありません」ということを言いますと、神様は「もし五十人正しい者がいれば、その者たちのために町全部を赦そう」と仰いました。けれどもここでアブラハムの直談判は終わりませんでした。27 節にはこう記されています。

「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、わが主に申し上げます。」—本当にここにはアブラハムの真剣で謙虚な祈りの姿勢が見えます。そしてそれはまたさらに神様の懐に入っていく大胆な祈りでもあります。「もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれません。それでもあなたは、五人足りないために、町のすべてを滅ぼされますか。」それに対して神様はおっしゃいました。「主は言われた。『もし、四十五人いれば滅ぼさない。』」

アブラハムはさらに人数を絞ってきます。40 人、30 人、20 人、そして最後は 10 人です。18 章 32 節でも言っているのですが、良く神様は「そこまで引き下げるのか!？」と怒らずにアブラハムとのやり取りをして下さったことかと思えます。物語として読むととても面白い話ですが、でも、もし私たちがソドムとゴモラの住民であったら、こんなに恐い話はないのでしょうか？住民があずかり知らない所で、その運命が決定されるやり取りが行われている、ということなのですから。しかし、この時のアブラハムの嘆願が—大胆な祈りが—、「その十人のためにわたしは滅ぼさない」との神様の言葉を引き出したのです。言ってみ

れば、神様はアブラハムとのやり取りの中で、そのお心を変えられたのです。これは驚くべきことです。

祈りについての素晴らしい本であるP・フォーサイスの『祈りの精神』の中の第2章「ねばり強い祈り」の中で、彼はこのようなことを書いています。

「われわれはあまりにも早く「み心がなりますように」と祈りやすい。あまりにも簡単に事態を神の意志として甘受することは、怠惰を意味するのである。神の意志に打ち勝つほどに祈ることが神の御心なのであり、神の意志の実現を目ざして、頑強にねばり強い祈りを捧げることは、さらに御心にかなうことなのである。」

また、フォーサイスはこうも言っています。

「神の意志は、孤立した力ではなく、人間とかかわる力である」。

深い言葉ではないでしょうか。勿論、神様は主権者として単独で何でもお出来になれる方です。それでも敢えて、神様のご意志は、人間と関わろうとされる、というのです。不思議ですね。神様は、執り成すアブラハムのような人を、み思いの中に「待つて」おられたかの様です。神様の審きに対して、ある意味、その滅びに「ノー」と言える人と真剣にやり取りしたのです。

アブラハムは「神の友」である、という表現が聖書の中にあります。イザヤ 41:8 です。神様は「わたしの愛する友アブラハム」とおっしゃっています。神様と人間とは、聖書は、決定的に違う存在であり、主従関係を貫いて語りますけれども、アブラハムだけは、神様の友とよばれているのです。「友」とは、どういう存在でしょうか？本当に心が分かち合うことが出来る、そして痛みを共有する関係ではないでしょうか。神様は、孤独な神様ではなく、人間であるアブラハムをも、そして私たちをも必要とされている存在なのですね！

[4] 神様の御心とは、滅びではなく、救い

私は最初の方で、宗教のもつ本質的な危険性を見ていくことは大事なことでないか、と佐藤 優さんの文章も引き合いに出しながら申しました。

聖書は、ソドムとゴモラだけではありません、この「世界の終わり」、天地創造を始められたお方が、やがてその歴史に終わりを与えられる時が来る、ということを語っています。この思想は、誤解を恐れずに言いますと、この世に対して絶望的になっているものに対しては、とても魅力的な教えなのです。実は私自身が若い時にそうでした。聖書のヨハネ黙示録を題材とした『オーメン』などというオカルト映画も心惹かれて見ていました。私が聖書に関心を持つ大きなきっかけになったのもそんな影響もあるのです。神様、何を以てるのか分かりません。私がオウム真理教に入っていたとしてもおかしくないと思うこともあります。オウム真理教が拡大していった時代は、バブルの崩壊の時でもあり、あのノストラダムスの大予言が流行っていた 20 世紀末です。ただでさえ若者ゆえに自分に自信が持てない。

そしてこの世界も近い将来、聖書が語っているという預言のように滅びるのであれば、私もろとも滅ぼして欲しい、そして死んだ後に天国・極楽に行けるのであれば、私はこの世を捨てる、といった破滅的思考になびく人が少なくなかったことも、少し分る気がするのです。「宗教」(括弧付きで言いますが)とは、そんな危険を内に孕んでいるものなのです。

けれども、聖書は自己流で読むととんでもないことになります。神様は、神様の深い心の理解者、或いは神様の友として、アブラハムを立てて下さのです。ここは本当に大事です。神様はアブラハムが、「主よ、ソドムとゴモラを、滅ぼさないで下さい」とそのように祈ることを期待し、待っておられたのではないのでしょうか？それは逆に言えば、神様の御心と言うのは、本質的に「滅び」ではなく、「救い」だという事に他なりません。

ソドムとゴモラは、自分たちの知らないところで、そんな祈りのやり取りがされているなどということは知りませんでした。「隠されたところ」での、しかし、そのことで現実が変わってくるやり取りがあった、ということです。

そうなのです。この世界は、実は、大きなとりなしによって支えられているのです。今もそうなのです。私たちの知らなかった所で、けれども、間違いなく、私たちのために神様に祈っていて下さっている祈りがあるのです。

ソドムとゴモラの町はこのあと 19 章を見ると残念ながら滅ぼされてしまいました。その町に 10 人も正しい人がいなかったということなのでしょう。そうなのかもしれません。聖書はその点厳しいです。この世界に神様の前に、罪がない人間など一人もいないと言います。「義人なし、ひとりだになし」と詩編でも言われていますように、神様の思いが「滅び」を選べば、たちどころにこの世界はなくなってしまうのかもしれません。けれども私たちは、この世界と私たち自身の救いに絶望する必要はありません。

そうです！ただひとり、神の独り子イエス・キリストが、全ての罪をご自分が負われ、神様に執り成し祈って下さったあの祈りが、私たちを今支えているのです！

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」。(ルカ 23:34)

私は思います。これはいわゆる「宗教」ではない、と。救いをあきらめない神様の愛の「福音」です！

…実は、このような神様の燃えるような愛の思いは、既に旧約聖書でも示されているのです。今日読んで頂いた招きの聖句がそれです。

「ああ、エフライムよ、お前を見捨てることができようか。イスラエルよ、お前を引き渡すことができようか。わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる。わたしは、もはや怒りに燃えることなく、エフライムを再び滅ぼすことはしない。わたしは神であり、人間ではない。お前たちのうちにあつて聖なる者。怒りをもって臨みはしない」。(ホセア書 11:8～9) 神様は実に、人間のために、憐れみに胸を焼かれるお方なのです。

[結] イエス様に結びつくということ

私たちに求められていること、それはただ一つです。滅ぶべき存在でしかない私が神様の桁外れの愛によって忍耐され、赦されているということ、それをハッキリ示して下さった主イエスに聞く、ということです。このお方と、祈りを通し、礼拝を通し、結びつくということです。その時、私たちも不思議な様に、アブラハムと同じ、「祝福の源」とされ、こんな私の人生でもみわざのために用いて頂ける、そのことを喜ぶ歩みへと進ませて頂けます。私自身、何の目標もなかった空しい人生から、この主イエスと共に生きる幸い、このお方に生涯を捧げる幸いを与えて頂きました。本当に感謝です。

最後にヴァルター・リュティという20世紀のスイスの牧師の小説教集からの祈りの言葉をそのまま祈り、またそのあと、私の言葉でも祈りたいと思います。

リュティはこう祈ります。

<主イエス・キリストよ、あなたは私ども全ての者の主であり父であるお方の前に、夜も昼も立ち、私どものとりなしをして下さいます。あなたをほかにしては、天にも地にも、とりなしをして下さる方はなく、苦しみを救って下さる方はありません。主よ、もしあなたがもう立っていられなくなったら、私どもはみな倒れるほかないのです。アーメン。>